

1. 調査目的等

中学校全学年の生徒の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証やその改善及び進路指導に役立てる。

2. 学校ごとの指標

すべての教科で標準偏差値(50)を上回る。

3. 指標にむけての取組

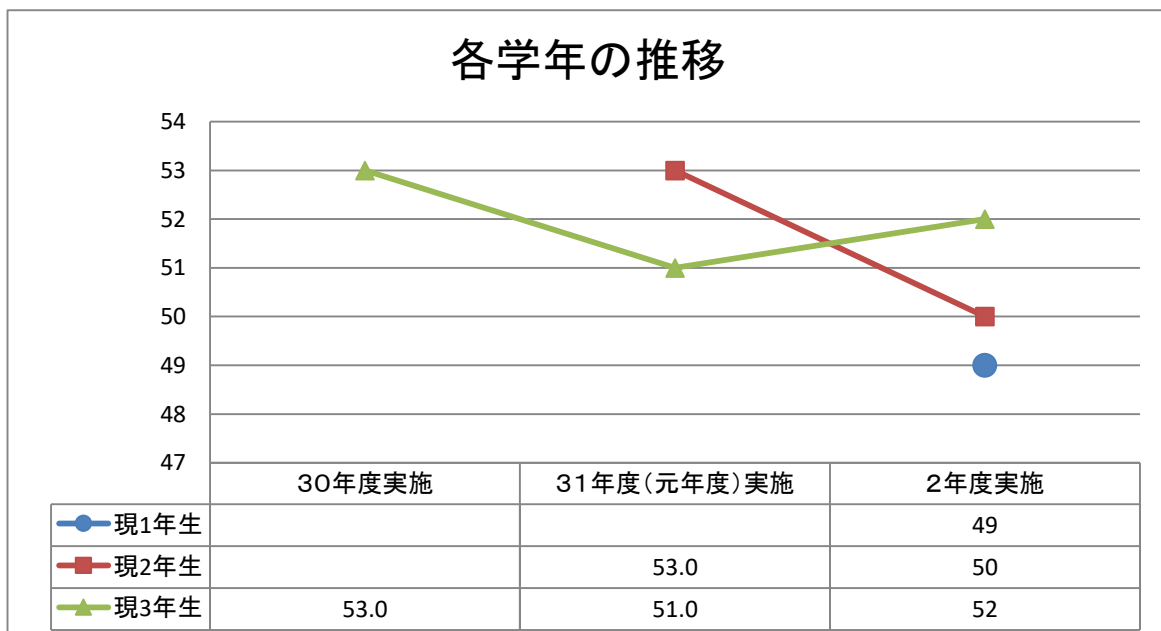
○各種テストの分析を学力向上委員会、教科部会等で行い、生徒の課題を共有しながら授業改善をすすめる。

- ・校内研修の日常化に努め、「導入の工夫」「かく活動」を意識した授業づくりを計画的にすすめる。
- ・家庭学習の見直しを図り、質と量を考えた内容になるように努める。
- ・単元ごとや確認テストや、重要語句の定着をめざした小テスト等を実施し、生徒の基礎・基本の定着具合を把握し、授業改善につなげる。

4. 調査結果

※学校平均5年間の推移 (標準偏差値50に対して)

年度	28年度	29年度	30年度	31年度 (元年度)	2年度
本校(A)	52.0	51.2	51.3	51.6	50.3
嘉麻市(B)	47.3	47.9	49.3	48.8	48.6
(A)－(B)	4.7	3.3	2	2.8	1.7
標準偏差値との差 (A)－(50)	2	1.2	1.3	1.6	0.3



5. 各学校における分析

- ・学年のまとめの時期である3月から臨時休業が続き、生徒の学習の定着具合が心配されたが、現2・3年生については、総得点において標準偏差値50を超えることができた。
- ・特に3年生は本校の指標としていた全教科標準偏差値50以上を達成することができた。自学ノートを見直し、基礎・基本の定着に向け、朝や帰りのHRの時間を活用した取組(生徒間での教え合い学習)や、生徒の課題を把握しながら授業を見直していることが効果につながった。また、臨時休業中も、進路を意識しながら多くの課題に確実に取り組んでいた生徒の学習意欲の向上も結果につながっていると思われる。
- ・2年生は1年生の4月と比較すると下降気味で、今後の大きな課題であると受けとめている。家庭学習の自学ノートや、授業での基礎・基本の定着に取り組んでいるが、思考力を問う内容などテスト結果を再度分析し取組を見直す必要がある。
- ・標準偏差値に届かなかった教科は平均点で2～4点程度の差であり、基礎・基本の定着を図るための取組を継続して行う必要がある。

6. 各学校における今後の取組

- 次年度から、新学習指導要領が実施されることを踏まえて、学んだ知識・技能を活用し、課題解決等をおこなうための思考・判断・表現ができるような授業づくりをすすめていく。そのための授業改善を意識した校内研修の日常化を図る。
- ・生徒の実態把握(課題把握)を図るために、学力向上委員会や教科部会を計画的に実施し、改善をすすめる。
- ・5教科を中心に単元テストを実施し、短いスパンで学習の成果を把握、授業改善に努めることができるようにする。また、単元テストにあわせて、家庭で計画的に学習ができるように家庭との連携を図る。
- ・朝や帰りのHRの時間を活用した小テストを実施し、基礎・基本の定着をすすめる。
- ・生徒会活動の活性化を図り、英単語コンクール等、全校生徒で取り組む。
- ・「鍛ほめ」の取組の一環として、英検受験等の機会を計画し実施していく。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

- ◎今後の取組を具体化し推進することができるように、特に、次の3点について指導助言及び支援を行うとともに、周知徹底できるように継続的に指導する。
- ◆嘉麻市学力向上全体構想に設定した思考を伴う「書く(かく)活動」や目的のある「話し合い活動」を核とした授業づくりを推進する。そのために、校内研修での授業観察指導を実施したり、「学力向上に向けた授業づくりの8つのポイント」や「書く活動ポイント9」を活用することができるように指導助言や支援を行ったりする。
- ◆嘉麻市学力向上全体構想に設定した「家庭学習の取組」を推進する。そのために、個に応じた学習課題の提示を進めるとともに、自学の習慣化に向けた具体的な取組を提示したり各学校の取組のよさを交流する場を設定したりする。
- ◆学力の根源をなす非認知能力の育成を推進する。そのために、「鍛ほめ福岡メソッド」の仕組みを機能させるよう指導助言を行う。